

長野県の埋蔵文化財情報誌



長沼城跡出土唐津焼

信州の遺跡

第19号

最新調査成果から1

幻の城

長野市

ながぬまじょうあと
長沼城跡

長沼城は戦国時代武田信玄ゆかりの城とされ、千曲川沿いの平地に築造された南北約650m、東西約500mという大規模な平城で、16～17世紀の城跡と考えられている。発掘調査は昨年度秋から実施し、継続して今年度も調査中である。

二の丸推定地の調査では、土坑、溝跡、遺物集中といった遺構が発見された。出土遺物にはカワラケ、内耳鍋などの土器や陶磁器、石臼や五輪塔といった石製品、銭貨や鉄砲玉、鉄釘等の金属製品、その他被熱赤化した壁材や動物骨など様々な遺物が出土している。

その一角には、焼土や炭化物が分布する範囲が確認され、カワラケや16世紀中～後半頃の瀬戸焼の丸皿などの生活道具が出土していることから、中世～近世の屋敷地や建物跡だった可能性を考えている。

きたみかづきぼり

北三日月堀推定地では、縄張り図とほぼ同規模の堀跡の平面形を検出し、地表下3m強でその底部を確認した。

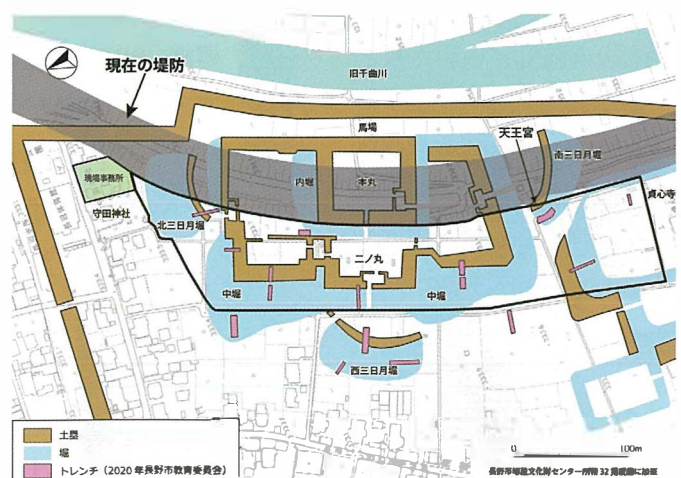
6月以降、調査は新しい地区へ順次展開していく。昨年
から調査している地区を含め、城内の遺構の規模や時期について解明していきたいと考えている。今後、現地説明
会等により、調査成果を発信していく予定である。調査成果にご期待ください。(岡村秀雄)



長沼城跡調査地点



北三日月堀の範囲(人が立ち並ぶ上側になる)



長沼城跡の縄張り図

長野市 浅川扇状地遺跡群

浅川扇状地遺跡群は飯縄山^{いひづなやま}を水源とする浅川によって形成された扇状地上に立地する。今回の調査では、弥生時代後期から平安時代の集落跡、中世の居館^{きりはらようがい}（桐原要害）の堀跡などが見つっている。ここでは、弥生時代後期・古墳時代前期の集落と墳墓について焦点をあてて紹介したい。

弥生時代後期は、中葉に北側地区で、後葉には南側地区で集落跡が見つっている。特に、北側地区の北西約500mには、吉田高校グランド遺跡で後期中葉の集落跡が検出されており、両者が集落として一体であったとすれば大規模な拠点であった可能性がある。

墳墓に着目すると、終末期の方形周溝墓の周溝からは、当地独特の口縁が二重となる珍しい形態の壺が出土しただけでなく、北陸系土器や海洋性珪藻も検出されている。

古墳時代は、前期から後期の遺構が見つっているが、特に、前期の竪穴建物跡は広く分布していて、かなりの大規模集落が営まれていたことが分かった。そして、この時期も北陸や東海地域の特徴をもつ土器が多数出土している。また、該期の墓域は、方形の墳墓が6基近接して造営されているが、そのうちの1基の周溝内の葬送儀礼跡からは、西濃地域の影響を受けた高坏が出土している。この時期の東日本各地で広範囲に展開された地域間交流を示すものと理解される。

このように、弥生時代から古墳時代にかけて北陸や東海地域と活発に交流していた大規模集落を営む在地の有力者の存在が浮かび上がってきた。（西 香子）



遺跡遠景（南東から）



古墳時代前期の墳墓出土土器

南相木村 孫七坂遺跡

孫七坂遺跡は、南相木村と南牧村境、標高1,090m前後の谷筋に立地する。遺跡周辺には、山林と整備された高原野菜の畑地が広がる。今回の



遺跡全景（北より）

調査地点では、後世の開発による造成土が厚く堆積

し、地形が大きく変わっていることが判明した。遺構の検出はなかったが、造成土より下層で、縄文時代の土器を包含する層が部分的に残っていることを確認した。出土した土器片は数点で、詳細な時期は不明だが、縄文前期後半以降と思われる。（寺内貴美子）



朝日村 氏神遺跡

氏神遺跡は、^{くさりがわ}鎖川の支流である内山沢左岸、標高約810mを測る南東向き緩斜面の段丘上に立地する。縄文時代中期初頭・中葉及び平安時代の集落遺跡である。

縄文時代中期初頭は、^{ごりようがだい}五領ヶ台Ⅱ a 式期（約5500年前）の竪穴建物跡3軒、陥し穴1基、貯蔵穴や墓坑の可能性ある土坑32基を検出した。出土遺物には関西地方の土器や岐阜県が原産地の^{げろいし}下呂石でできた石器が認められ、この時期の人の移動やモノの流通を研究するための重要な資料となった。

縄文時代中期中葉は、^{とうない}藤内Ⅰ式期（約5000年前）の竪穴建物跡2軒、貯蔵穴の可能性ある土坑3基を検出した。中期初頭と異なり、この時期の遺物には、遠隔地のものがほぼ認められず、人やモノの動きに変化があったことが予想される。

平安時代は、10世紀中葉から後葉の竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、墓坑1基、土坑14基を検出した。松本盆地において、この時期の墓坑の調査例は少なく、当遺跡は集落と墓坑の関係を研究するための貴重な資料となった。（村井大海）



縄文時代中期中葉の遺物

中野市 南大原遺跡 - 信州鉄づくり事始め -

竪穴建物跡の土を振って見つけ出した長さ2cmにも満たない鉄片。これは信州人が鉄器づくりを試みはじめた頃、工房内に残された破材と考えられている。では、鉄づくりを行っていた弥生集落とは、どのような姿だったのだろう。

南大原遺跡を含む北信地域（中野・飯山）の千曲川流域には、国の重要文化財に指定された^{どうか}銅戈と^{どうたく}銅鐙が一括埋納されていた柳沢遺跡をはじめとして、弥生時代中期の重要な遺跡が連なっている。県境に近いこの一帯は、日本海沿岸からの経路で、新来の文化や技術をいち早く受容していた。

南大原遺跡は弥生時代中期という全国的にも早い段階に、鉄器加工を



弥生時代の鉄製品・小鉄片・焼成粘土塊

行った工房跡が複数確認された。それと共に、縄文時代にルーツを持つ祭祀場や墓域も集落内に設けられていた。このことは、当地が山を越え川に沿い、周辺地域との交流を行いつつ、新しい社会様式を取り入れながらも、伝統的な信州スタイルを遺して地域の独自性を高めていたことを教えてくれる。（柳澤 亮）



弥生時代中期の竪穴建物跡（工房跡）

松本市 史跡小笠原氏城跡の保存活用

おがさわらししろあと
 史跡小笠原氏城跡は、室町時代から戦国時代にかけての信濃守護小笠原氏の居城跡で、平地に築かれた井川城跡と、山地に築かれ、山麓の本拠と一体となって機能した林城跡（大城・小城）からなる。松本城を含めると4キロメートル四方の中で、室町時代から近世までの領主の居城や政治の場の変遷をたどることができる。



井川城跡は、遺構の大半が埋没し、櫓台と伝わる塚状の遺構のみが地表で見られる。林城跡は、曲輪や堀切、石積等が残り、合流する長大な竪堀や無数に配置された曲輪群といった小笠原氏の山城の特徴を見ることができる。

松本市は、平成25年度から27年度にかけて、井川城跡及び林城跡の学術的な価値付けを行う調査を行い、「小笠原氏本城の変遷」をテーマに3城の国指定を目指した。結果、平成29年に井川城跡及び林城跡（大城）が史跡指定を受け、残る林城跡（小城）も調査の後、平成31年に追加指定を受けた。これら3城跡の史跡指定を受け、史跡を次世代へ継承するための保存活用の方針を定めるべく、令和2年度から3年度にかけて「史跡小笠原氏城跡保存活用計画」の策定を行った。策定は、有識者と地域関係者からなる「史跡小笠原氏城跡保存活用計画策定委員会」を組織して行い、史跡の現状と課題を「保存」、「調査研究」、「活用」、「整備」、「運営・体制の整備」の観点から整理した。これらの課題を克服するために、保存活用計画では、①史跡を保存し、信濃における戦国時代の歴史と全国的な平地居館から山城への領主拠点の変遷を学べる場としての活用、②史跡の本質的価値、魅力、調査研究成果の積極的な発信を通じ、多くの人から大切にされ、次世代に継承される史跡を目指すといった2つの大綱を定めた。今後は、整備基本計画を令和5年度までに策定し、本格的な整備事業へと移行する。

史跡小笠原氏城跡は、文献史料が乏しく、調査も限定的であり全貌が明らかになっていない部分が多くある。調査研究を継続して行い、結果を基に大綱を実現できるような整備を行っていききたい。

（松本市教育委員会 宮井博樹）



林城跡遠景 左：大城、右：小城、中央の谷が山麓本拠推定地



井川城跡航空写真（令和元年度） 写真中央の耕作地一帯が井川城跡

茅野市 縄文時代遺跡

—縄文のたたずまいの再現に向けた再整備—

本史跡とその周辺には、台地と谷が織りなす八ヶ岳西麓の特徴ある地形と、そこに営まれた縄文時代の人々の生活の跡が一体的に保存されている。平成12年に完了した第1期整備から20年が経ち、復元住居や園路の劣化など種々の課題が生じた。また、昨今の縄文ブームにより来場者は増加しており、本史跡の重要性は一段と増している。

こうした現状をふまえ、令和2年度に「第2期整備基本計画」を策定した。この計画は、「縄文のたたずまいの再現」を目指す、少なくとも20年の期間を要する構想の前半期と位置付けており、本史跡が抱える課題解決が目的である。後半期の第3期では、縄文集落を復元し学術的価値を顕在化させるなど、本史跡の価値を高めるための整備を行う。

令和3年度から、サイン多言語化と植林カラマツ伐採等の第2期整備事業と共に、追加指定を視野に入れた確認調査や追加指定地の公有地化を進めており、第3期整備事業にスムーズにつなげていきたいと考えている。（茅野市教育委員会 小池岳史）



史跡構想図

川上村 大深山遺跡の整備

大深山遺跡は、昭和30年代に発掘調査が行われ、昭和41年に史跡の指定を受けた。発掘調査、整備、保護などが地元住民主体で行われてきたが、半世紀を経て史跡を取り巻く状況は変化し、新たな保存と活用に向けて再整備の必要が生じてきた。

そこで、平成28年から日本大学考古学研究室の協力を得て保存活用に資する発掘調査を実施し、令和元年度から保存活用計画の策定を開始した。そして、令和3年4月に「千曲川源流の高山中に花開いた縄文の里を未来へ」を基本理念とする保存活用計画を策定した。この計画は、天狗山や赤顔山を望む標高1,300mの高い山中に位置し、竪穴建物跡を窪地としてみるができるという、本遺跡の特徴を最大限に生かしたもので、現状を大きく変えない整備を目指している。物足りなさを感じるかもしれないが、これにより、更に強く山中の縄文的景観を感じとってもらえるのではないかなと思う。復元住居の整備・維持といった課題はあるが、令和2年度から段階的に整備を開始しており、今後も計画に沿った整備を進めていきたい。

（川上村教育委員会 長崎 治）



復元住居と竪穴建物跡の窪地

信州の近代遺跡

－近代遺跡の射程－



「信濃国埴科郡西條邑六工製糸場之図」長野県立歴史館蔵

このごろ近代の文化財に対する興味関心が高まっている。とくに「レトロ」と形容される近代の建造物は、多くの方が訪れ愛好家による情報交換も盛んである。これは建造物の美への関心だけでなく、懐古や郷愁という自らの生活との接点が導きだされることも大きく関係している。駄菓子屋を訪れた平成生まれの若い方が「懐かしい」と口にするのも、映像や伝聞といった自らの記憶により再現されたイメージが重り、ノスタルジーとなって発露したものと考えられる。

近代遺跡の射程はそこにある。縄文時代の石斧を見て「懐かしい」と言う人はおらず、これまで考古学が主なターゲットとしてきた原始の時代には、自らの生活との接点が不足していることがわかる。それを埋めるのが近代遺跡である。E.H.カーの『歴史とは何か』(岩波新書 1962年)の中に、「歴史は現代と過去の対話である」という有名な一節があるが、近代遺跡にみられる歴史の入口に、我々は注意を払って来なかったのかもしれない。入口があって初めて、原始から現代まで続く歴史が一続きのものとして完成するのである。

写真は、上田城の堀跡の中に建設された鉄道上田交通真田傍陽（さなだそえひ）線跡の公園前駅跡である。現在では路線跡は遊歩道となっているが、かつてそこに鉄道が通っていたことを知る人も多い。この鉄道は上田城跡がある高さ約15mの河岸段丘を縦断する必要があったため、上田城二の丸堀跡の開削部を利用して敷設している。

現在、遊歩道を歩くことによって、かつて近代に敷設された鉄道があり、さらにそれが上田城の堀であったという地域の歴史が一目でわかる。また「公園前駅」という名称は、上田城跡が日本の近代公園の先駆けとなったことを示している。遊歩道の散策をきっかけとして、近代の鉄道跡によって開かれた歴史の入口は、近世の上田城の歴史へと繋がっている。現在、史跡上田城跡は、近代も含めた包括的な保護を計画しているが、それは地域住民にとっての上田城の歴史を正確に把握し、伝えていくことになる。

(長野県立歴史館 石丸敦史)



上田城跡に残る鉄道路線跡（右側は公園前駅のプラットフォーム跡）



石川条里遺跡で居館の堀跡（室町～戦国時代）を調査中、新しい十円玉のような色をもつ遺物が顔を出した。傷が付くのを恐れ、直ぐさま移植ゴテの掘り下げを止めた。

周りの土を取り除くと、兜の前面につける立物、鍬形であることがわかった。それも鍬形一対を真ん中で折り曲げ、平らな面を下に置いていた。そのため、堀跡に流れこんだものではなく、意図がありその場に置いたと考えられる出土の様子だった。

武士の勇猛さの象徴でもある鍬形が、何故兜から外され、さらに折り曲げられたのか。兜は武具であると同時に、兜の鉢や立物に武威というシンボル性が込められている。頭上に直立する鍬形を折り曲げ、シンボルを故意に失わせたのが石川条里遺跡の鍬形である。

では何のためなのか。掘底からの出土のため地鎮や居館の廃絶儀式に伴う儀礼か、あるいは兜を装着した人物の何らかの意図なのか。およそ500年前の時代の遺物に耳を傾けたい。（長野県教育委員会 馬場伸一郎）



石川条里遺跡で出土した兜の立物

埋文本棚



戦後、開発と遺跡の保護の対立は先鋭化したが、こうした状況に折り合いをつけるべく、現状保存ができない次善の策として、遺跡を発掘調査し「記録保存」という形で、世に残し、次世代に受け継ぐことが可能であるとされた。

こうした業務のために、長野県埋蔵文化財センターは昭和57（1982）年に設立された。高速交通網整備などの多くの県内の大型開発事業に伴う遺跡の発掘調査を担って、調査した地点は401箇所、のべ133冊の発掘調査報告書という形にまとめられている。

本書には、埋文センターの調査に携わった人々が、記録保存には書けないドラマを描いている。学術的な報告を越えた部分に、人間が織りなす生き生きとした「歴史」が記述されている。次世代へのメッセージであるが、戦後の長野県考古学や地域史研究にも欠かせない情報に満ちた資料にもなっている。一読をおすすめしたい。（川崎 保）



（長野県埋蔵文化財センター編『信州発掘奮戦録—45人が語る、遺跡調査の40年』ポロンテ）

「日本の屋根」とも呼ばれる高山に囲まれ、山地や盆地が入り組む信州。信州を象徴するこの「山地」には、日本列島が動乱の渦となった南北朝時代～安土・桃山時代に数多くの「山城」が築かれた。

城に関係する調査・研究は、文献史学・城郭史（縄張り）・考古学・絵画史・建築史などの諸学問により学際的に行われているが、「普請（土木作業）」と「作事（建築作業）」で完成する城の実像を最も明らかにできるのが考古学である。



築城時の山城の姿を彷彿する鶯ヶ城跡の調査

本誌の冒頭に掲載している長沼城跡のような平

地の城だけでなく、信州では山城の発掘調査も行われている。人が登れないようにつくった山城に登る厳しい調査でわかったことは2つある。第1は、山城には建物や櫓、門、塀が建てられ、投石などの武器を保有していたことである。風雨が強い山の上にも建物などの構築物は建っていたのである。第2は、築城時の姿についてである。一般的に、山城は木々に覆われていたイメージを抱きやすい。ところが、広範囲に及ぶ発掘調査では、山城は山を切り盛りする土木工事で築城されていることと、城兵が籠る平場（曲輪）、攻める敵兵を防御する堀、土塁、切岸（人工の崖）などの城の施設が明らかとなった。木々を伐採しないと築城できないことがわかり、さらに地肌が露出する山城を記録した文献史料や絵画資料からすると、城の施設を構築した山の頂から中腹にかけては、存続時も地肌が露出する姿であったと理解できる。ちなみに、山城の発掘を経験した筆者は、木々がない山城に登る困難さを実感でき、山城が持つ防御的要素が理解できた。

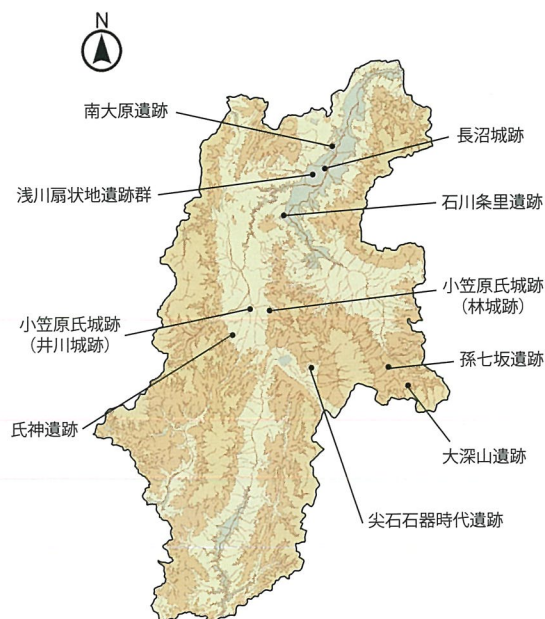
軍事拠点や戦時において武士や民衆が逃げ込む施設である山城は、遠くからでもその存在がわかるものであった。木々に隠れるイメージを抱いてはいけないことを発掘成果は物語っている。（河西克造）

編集後記

信州の遺跡第19号を無事に発行することができました。御多忙の中、原稿を執筆いただいた皆様に感謝申し上げます。

現在、当センターが調査中の長沼城跡、昨年度報告書を刊行した4遺跡等の他に、現在市町村で整備事業が進められている3遺跡を取り上げました。埋蔵文化財行政は、失われゆく遺跡の「記録保存」が業務の中心となりがちですが、保存・活用され現代社会の中で生き続ける遺跡も存在します。今号で取り上げた3遺跡が地域において新たな役割を獲得し、なくてはならない存在であり続けますよう御祈念申し上げます。（村井大海）

本号で掲載した遺跡位置



（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

<https://naganomaibun.or.jp/> 印刷：奥山印刷工業株式会社

この冊子は、令和3年度 地域のある埋蔵文化財活用事業で作成しました。